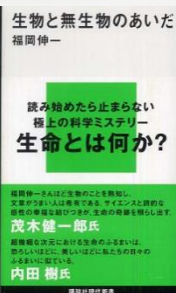


おすすめ 資料

05



先生の選んだ
1冊



『生物と無生物のあいだ』
福岡伸一（著）
講談社現代新書, 2007年
460.4 | FUK

動き続ける秩序

「音楽」ってなんだろう。そんな疑問を抱いたことはありませんか。ある辞書では「音楽」は「音による芸術」と説明されています。「音」はわかるけど「芸術」ってなんだろう。そんな新たな疑問ができてしまいます。もしかしたら「音楽」（や「芸術」）を「モノ」と考えるから行き詰まるのかも。「音楽」はわたしたちの目の前（耳の中？）で繰り広げられる「デキゴト」と捉えようと、考えやすくなるかもしれません。

「生物」ってなんだろう。そんなことを考えたことはありますか。ある辞書には「生きて活動し繁殖するもの」と書いてあります。「繁殖」は増えること。では「生きる」とは？ これまた難問です。

福岡伸一の『生物と無生物のあいだ』は、遺伝子やタンパク質を相手にする分子生物学の（一見、地味だけど実はスリリングな）歴史をたどりつつ、「生きること＝生命」の本質に迫ります。わたしたちの身体はいろいろな物質からできあがっています。その材料である分子は常に身体を

出入りして（呼吸や飲食・排泄はその一環です）、身体を組み替えています。流れのなかにある（動的）材料が、組み合わさって留まった（平衡）ところにあるのが身体、というイメージです。「生命」はこの「動的平衡」を維持する活動だというわけです。

その流れは時間的、つまり不可逆で、一度起きたことは二度と起きません。「生命」には時間（元には戻れない流れ）と秩序（組み合わせ）があるとこのわけです。こう考えると、「生命」は、秩序によって形づくられた「モノ」（タンパク質とかカルシウムとか）であるだけでなく、時間の流れにのった平衡維持活動という「デキゴト」と捉えることができます。

時間と秩序。何かを思い出しますか？ そう、われらが「音楽」です。世界には音が溢れています。音が秩序にしたがって並べられて鳴り、消える。わたしたちはその「デキゴト」を「音楽」として聴き取っているのだ・・・そんなことを想像させてくれる本です。



酒井健太郎先生

Recommended Book